

# キリシタン・日本語ローマ字写本で用いられる ` について

## — 「バレット写本」を中心に —

千葉軒士 (中部大学)

### 要旨

本稿は、キリシタン・日本語ローマ字写本で用いられるアセント符号の ` について、´ との関係性を精査することで、` が担う機能を論じるものである。イエズス会士マノエル・バレット神父が書写したアセント符号の ` と ´ を見る限り、この2つのアセント符号が左傾・右傾という対立で使い分けられていないことがわかる。また、` をさらに精査していくと、物理的スペースの有無という書記上の都合で ` として記されていたものがあることを確認できる。このことから、単なる o、u でないことを示すためのマークとして用いられた ´ が、書記上の都合により ` として表されることがあると推定した。これは ` と ´ が同一符号の環境変異において選択されるものであったためだと考えられる。

## 1. 問題の所在

本稿は、キリシタン・日本語ローマ字写本で用いられるアセント符号の ` に注目し、写本内で用いられる左傾したアセント符号の ` が担う様々な機能を検討するものである。また、その様々な機能との対応が、右傾したアセント符号´ と比した際にどのように異なっているのかを論じるものである。千葉 (2022a) は、「バレット写本」で使用されるアセント符号´ が様々な機能と対応することを明示した。しかし、` を精査すると、このアセント符号も´ と同様の機能と対応していることがわかる。これが何を意味するのか、本稿では検討する。

## 2. 先行研究とその問題点

ポルトガル出身のイエズス会士マノエル・バレット (Manoel Barreto, 1564-1620) が記した ` について、「バレット写本」と「難語句解」を精査した森田 (1976) は、以下のように説明する<sup>1)</sup>。

nhòbô (女房。 18 右-10)      reòbo (両方。19 左-16)

Ima yò (今様。 29 右-7)      youameno riògue (弱目ノリャウゲ。63 外-26)

始めの3例は、やや鮮明を欠くけれども、やはり ò であろうと思われる。o の上につけた *acento grave* ( ` ) の符号は、直立に近い形のものが多いけれども、左に傾いたものもあって、*acento agudo* ( ´ ) とは明らかに違っている。(中略) / これらによって、ò がオ段長音の表記に用いられたことが知られ、それも開音 ò にあたる場合がはるかに多いことも明らかである。日葡辞書で見ると、ポルトガル語文中にまじえ用いた場合には、ò の代わりにも用いてあるから、かかる場合には、開合を厳密には区別しなかったものらしい。

ポルトガル語にあっては、` は母音が開音であることを示すとともに、一方では同じ文字の結合を示すのにも用いられる。たとえば à、às をもって前置詞 a と女性冠詞 a、as との結合を示すがごときである。それ故、ò をば ò にあてて用いる反面に、ô にあてて用いたのは、ò を oo を示すものとして用いたのであろう。ともかく、難語句解に見える上述の ò も、当時

の慣用に従ったものであって、オ段の長音を示すと見ることができる。

(pp.340-341)

このように森田(1976)は、マノエル・バレットが用いた ` はオ段長音、特にオ段開長音を示すものであると捉える。たしかに、現代ポルトガル語の正書法において、 ` はその機能を有しているが、この時代にも適用されていたとは言い切れない。また森田(1976)は、右傾した ´ について、別ページで撥音の表記として言及する<sup>2</sup>。

㊦ ` Rógui (論議。49左-10)  
dôxí (同心。5右-1) (p.343)

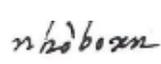
森田(1976)はこの右傾したアセント符号の機能を撥音の表示としている。このような例は、「バレット写本」、「難語句解」内では確認できるが、版本を精査した森田(1993)などで指摘があるように、版本では確認できず、写本での特徴といえる。

しかし、「バレット写本」を精査すると、この「バレット写本」においては、 ` と ´ の機能が極めて類似していることがわかる<sup>3</sup>。以下で左側に ` の例を、右側に ´ の例を示し、それぞれどのように用いられているかを示す。

・オ段開長音と対応するもの

 118v20 quòday  117v08 quóday いずれも「廣大」

・オ段合長音と対応するもの

 263v01 nhòboxu 「女房衆」  55v10 nhóbo 「女房」

・ウ段長音と対応するもの

 231v19 jjùji  229v02 jjúji いずれも「住持」

・撥音と対応するもの

 79v15 tamô vô 「給ふ 御」  79v20 vó yto 「御糸」

・濁音前鼻音と対応するもの

 299r05 xùgo  298v16 xúgo いずれも「守護」

ここで、 ` と ´ の機能別の使用数を示すと以下ようになる。

表 1 `・´ の機能別使用数<sup>4</sup>

	オ段開 長音	オ段合 長音	ウ段長 音	撥音	鼻音	濁音前 鼻音	省略	判断不 能	total
`	21	3	3	33	0	23	0	26	109
´	125	23	17	1096	97	331	179	77	1945
total	146	26	20	1129	97	354	179	103	2054

表 1 から、`・´ のどちらも様々な機能と対応し用いられているが、` は鼻音や省略に対応するものとして用いられない。そのため、この機能差を `・´ の違いと捉えることは可能である。しかし、そもそも、` は写本内で多用されないため、この機能差が有意であると言いつ切れぬ。そこで、本稿ではまず、この両符号は共に様々な機能と対応し用いられていたものとし、論を展開する。

次に個々の対応する機能に注目すれば、`・´ は共に撥音と対応する場合に最も多く使用されている。長音に対応するものに限れば、どちらも主としてオ段開長音に用いられている。森田（1976）はこのオ段開長音に用いられやすいことを取り上げ、` を「ò を oo を示すものとして用いた」、つまり ` はオ段開長音を示すものだと説明したのかもしれない。しかし、撥音など他の事象と対応した形でも付されている ` を、オ段開長音だけを示していたものと限定して捉えることは難しい。もしこの写本の筆者であるマノエル・バレットが ` と ´ を上に述べた様々な事象との対応を示すために用いたのであれば、そもそも左傾した ` と右傾した ´ には差異があったのだろうかという新たな疑問が生じる。

もしこの両アセント符号が同じ機能を有していたのであれば、この 2 つのアセント符号の使用は、同一符号の自由変異における選択によるものだと考えられる。本稿では、「バレット写本」 「難語句解」の書写者であるマノエル・バレットは、` と ´ を左傾・右傾という対立で明確に使い分けていたのだろうかという問いを契機として、` と ´ を書記論の観点から検討し、そもそもキリシタン・日本語ローマ字写本で用いられた ` は何を示すために用いたのかについて考察する。

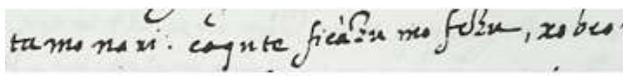
### 3. ` が用いられやすい環境

「バレット写本」で用いられる ` を細部にわたり見ていくと、書記上の都合で ´ ではなく ` が用いられたのではないと思われる例が存在する。その例を以下検証していく。

#### 3. 1. 横の物理的スペースの有無により ` が用いられる例

以下の例で ficazu の a に ` が付されている。

・ z の例<sup>5</sup>



「バレット写本」 231v16

tamo nari. caqute **ficàzu** mo fezu, xobeo  
 (給ふ なり. かくて 日数 も 経ず 諸病)

注目するのはこの a の文字の上部にあるスペースに後続する文字 z の頭の部分が入り込んでいることである。 ` と ´ が同じ機能を有していたと仮定すれば、ここでは ´ を用いることも可能であろう。しかしここで ` を用いると、直前の a の上部を覆っている z の部分と重なり、アセント符号としての判別が難しくなる。

ここで ` と ´ の違いを考えよう。 ` は平面の左上を始点とし、そこから右下に向かうことで左傾し、 ` となる。逆に ´ は平面の右上を始点とし、そこから左下に向かうことで右傾し、 ´ となる。ここから ´ は文字の上部のスペースのうち、右上にスペースが無い際には書きにくくなると考えられる。このような状況下では、 ´ でなく ` が用いられたのではないかと仮定してみる。

マノエル・バレットは上述のように z を直前の文字の上部を覆うように記すことがある。そのために z が後続する文字の右上のスペースが奪われ、そこに ` が用いられている。後続する文字が z 以外の場合でもこのようなことは起こるのだろうか。 ` が用いられる際に後続する文字の傾向を考える。以下、 ` と ´ が付されている文字に後続する文字ごとの使用数とその使用率を示す<sup>6</sup>。

表2 `・´ が使用されている文字に後続する文字別の使用数と使用率<sup>7</sup>

文字	` 使用数	` 使用率	´ 使用数	´ 使用率
a	0	0	93	5.1%
b	10	9.1%	63	3.5%
c	3	2.7%	130	7.2%
ç	0	0	0	0
d	15	13.7%	180	10.0%
e	0	0	2	0.1%
f	0	0	28	1.5%
g	14	12.8%	267	14.9%
h	0	0	0	0
i	0	0	7	0.3%
j	23	21.1%	95	5.3%
l	0	0	0	0
m	2	1.8%	137	7.6%
n	8	7.3%	168	9.3%
o	0	0	4	0.2%
p	0	0	4	0.2%
q	0	0	53	2.9%
r	1	0.9%	22	1.2%
s	1	0.9%	19	1.0%
í	2	1.8%	6	0.3%
t	2	1.8%	92	5.1%
u	2	1.8%	39	2.1%

キリシタン・日本語ローマ字写本で用いられる ` について  
 — 「バレット写本」を中心に —

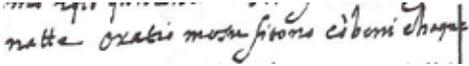
v	2	1.8%	54	3.0%
x	4	3.6%	56	3.1%
y	1	0.9%	30	1.6%
z	15	13.7%	37	2.0%
語末	0	0	274	14.0%
行末	4	3.6%	85	4.7%
total	109		1945	

表 2 より、` の使用率が高いと思われるものは **b・d・g・j・z** である。この **b・d・g・j・z** の使用率を ` と ´ で比較すると、**g**を除いた **b・d・j・z** はいずれも ` の使用率の方が ´ のそれよりも高くなっている。以上のことより、` は **b・d・j・z** の前では用いられやすいと言える。

この点を取り上げれば、イエズス会司祭ジョアン・ロドリゲス (1561?–1633) が『日本大文典』などで「**D, Dz, G** の前のあらゆる母音は、常に半分の鼻音かソンスネーテかを伴ってゐるかのやうに発音される。即ち、鼻の中で作られた幾分か鼻音の性質を持ってゐる発音なのである。(p.637)」と記すように、` が鼻音表示とのみ対応しているように感ぜられるかもしれない<sup>8</sup>。しかし、そもそも ` と ´ は濁音前鼻音として多用されるため、**d・z** の前で数が多くなるのは至極当然である。また **b・j** の前でも用いられる点を鑑みると、単にロドリゲスの発言をそのままに受け取ってはならないことがわかるだろう。

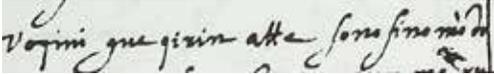
ここで、実際に先に確認した **z** を除く **b・d・j** が後続した際の例を確認しよう。

- ・ **b** の例



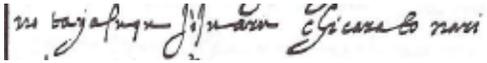
「バレット写本」129v10

natte oratio mosu fitono **còbeni** chaqu  
 (なって オラシヨ 申す 人の 頭に 着)
- ・ **d** の例



「バレット写本」352r15

voqini gueqirin atte sono fino **mòdo**  
 (大きに 逆鱗 あつて その 日の 問答)
- ・ **j** の例



「バレット写本」118r09

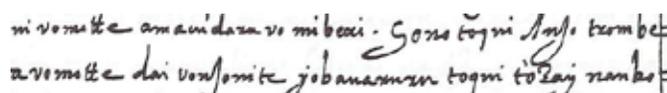
no tayasuqu **jòjuaru** chicarato nari  
 (の たやすく 成就ある 力と なり)

これらの影印の **b** の例の **còbe**、**d** の例の **mòdo**、**j** の例の **jòju** も、**z** の例のように、右上にスペースが無く ´ を用いにくい状況で ` が付されていることがわかる。ここから、これらの例における ` は、後続する文字と重ならないようにするために用いられたのではないかと推測できる。また、**b・d・j** という文字の特徴は、いずれも写本内で縦に長く記され、かつ、前接する文字を覆う部分がある、さらに言うなれば逆三角形様の形を有し、その上部が横（左上方）に広い点にある<sup>9</sup>。

´ が付された文字に b が後続する 10 例中 2 例、d が後続する 15 例中 6 例、j が後続する 23 例中 10 例、z が後続する 15 例中 11 例の全 29 例において、ここまで見てきたような後続する文字が前接する文字の右上部に干渉していることが確認できる。後続する文字が縦に長く、かつその上部が横（左上方）に広く記されているということは、´ を書く際の始点及び ´ そのものと重なりやすくなり、読み手がそれをアセント符号だと認識することを困難にする可能性がある。この横の干渉による誤解釈の危険性を避けるため、これらの縦に長くかつ左上方に張り出した形状の文字が後続する際には、´ ではなく ` が選択されやすかったと見ることができよう。

### 3. 2. 縦の物理的スペースの有無により ` が用いられる例

「バレット写本」において ` の付された文字の数は総数にして 109 例ある。その内の 29 例は後続する文字の横の干渉によって、´ ではなく ` が用いられた可能性を前段で指摘した。では残りの 80 例が ´ の代わりに ` で記されたという要因は他にないだろうか。そこで、まず以下の例を見よう。

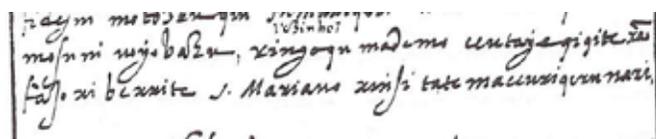


「バレット写本」 45r12-13

mi vomotte amacúdaru vo mibexi. Sono toqui Anjo trombe=  
ta vomotte dai vonjonite yobauaruru toqui **tòzay** nanbo=10

(身をもって 天下る を 見べし。その時 Anjo trombe  
ta をもって 大 音声にて よばわるる 時 東西 南方)

ここに示した影印の 2 行目行末の「tòzay（東西）」という語に注目する。ここでは o の上に ´ が付されている。オ段合長音や濁音前鼻音という事象と対応させるのであれば、ここに ´ を付しても構わないことになる。しかしここで ´ は選ばれていない。そこで注目するのは、tozay の o の右上のスペースが、1 行上の j の文字が大きく記されたことにより奪われていることである。前段でも述べたが、´ は文字の上部のスペースのうち、右上にスペースが無い際には書きにくいという特徴がある。上述した例はこの ´ が書きにくい例と考えられる。また他の例も見よう。



「バレット写本」 122v16-17

mofuni uoyobazu, xingoqu mademo ccutaye qiqite xaō

**fàjo** xi bexxite s. Mariauo xinji tatemaccuri qeru nari.

(申すに 及ばず。神国 までも 伝へ 開きて キリシタン  
繁盛し 別して サンタマリアを 信じ 奉り ける なり)

この影印の 2 行目行頭の「fàjo（繁盛）」という語に注目する。ここでも a の上に ´ が付されて

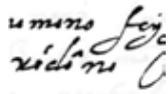
いるが、その右上には 1 行上の「」の文字が大きく記され、a の右上のスペースを奪っているように見える。

このように「バレット写本」内では、アセント符号が付されるべきスペースが 1 行上の文字に奪われることによって ` を用いることができず、 ` が用いられたと考えられる例が観察される。物理的スペースによるアセント符号の選択は、前段で述べた横の干渉のみでなく、縦の干渉も考えられる。このように縦の干渉により、 ` を記せずに ` が用いられた例を 13 例確認できる。

#### 4. ` が用いられた理由

なぜ同じ事象と対応する箇所 で用いられながら、 ` と ` は左傾・右傾という異なる形状で記されたのか。ここまでの考察で、後続する文字により物理的スペースが奪われる横の干渉や、また 1 行上の文字が物理的スペースを奪う縦の干渉により、 ` ではなく ` が用いられている例を確認してきた。このように書記上の都合で形を変えることがあり、また、ある事象に対応するためにある形状を有するアセント符号が選ばれるということが必然ではないということ を考慮に入ると、バレットが ` と ` を機能の違いで使い分けていたとはやや考えにくい。 ` を付して表現できるものも物理的スペースによっては ` を用いている例があるところを見ると、バレットが用いた ` と ` は、機能により使い分けられていたものではなく、同一符号の環境変異における選択によるものであったと推定される。右上部のスペースが無い際には主に ` を用い、スペースのあるところでは主に ` を用いながらも ` と ` のいずれでもよいとしたのがこの 2 つのアセント符号の関係であろう。

ここで考えねばならないことは、仮にある事象とある符号を対応させようとしたのであれば、あらゆる方法を用いてでも一定の符号を用い、その機能を明示するのではないかという点である。そこで以下の影印を見てみよう。



「バレット写本」13r10-11 xódono (諸道の)

この例においては、オ段の合長音に対応する形で ` が用いられており、しかも ` を付すための上方のスペースが狭くなっているにも関わらず、 ` を用いるために、o の真上ではなく、やや右にずらして ` が付されている。オ段長音の開合と対応する形で用いられる ` と ` では、この符号のもつ特定の機能を必ず表示し、対応させるために位置をずらすという手段が選ばれる。このようにオ段の長音と専ら対応し用いられる ` と ` が形状を変えることは無い<sup>11</sup>。これに対し、 ` と ` においては位置をずらすという手段が取られることは無く、スペースにより形状を変化させて用いられる。このようにある一定の形状で示すという方法にこだわりを見せないというところからも、この 2 つのアセント符号の左傾・右傾に必然性は無いものと思われる。

以上のことから、従来考えられていた左傾・右傾という対立による機能の違いは、このバレットの書写物では無かったといえよう。この本稿で導き出した結論を、千葉 (2022a) で

指摘のある「´は単なる o、u でないマークとして利用されていた」という指摘と照らし合わせると、そもそも「バレット写本」内では ` と ´ は使い分けられていたのではなく、ともに単なる o、u ではないマークであった可能性が浮かび上がる<sup>12</sup>。このように考える根底には、そもそもキリシタン文献の版本には、撥音は文字 n（または m）あるいはアセント符号の ~ (til) で示し、長音は、オ段合長音は ^ で、オ段開長音は ˇ で示すという、機能が明確な、つまり一つの事象のみと対応する専用符号があるからである。それに比して、主に写本で用いられていたアセント符号の ` と ´ は、様々な事象と対応しており、何らかの一定の事象と対応する専用符号として用いられてはいない。特定の事象と対応した特定の機能を有するものではなく、単なる o、u ではないマークであったからこそ、` と ´ はその形状が特定されていなかった可能性が考えられる。このように考えることで、直立に近い形状も説明することができよう。つまり、傾いていることではなく、「何らかの印」が付されてさえいれば、事足りたのではなからうか。^ と ˇ は専用符号であり、その形状を保つことが重要であった。しかし、´ と ` においては専用符号としては用いられておらず、o や u の上にこの2つのアセント符号のいずれかを付すことで、単なる o、u とは異なることをマークする意図があったと考えることができよう。

マノエル・バレットは単なる o、u ではないマークとして右傾した ´ を用いた。しかし、物理的なスペースの有無という書記上の都合で左傾した ` として記すこともあった。これはこの2つの符号が同一符号の環境変異において選択されるものであり、どちらに傾いているのかというその形状が厳しく問われることは無く、ただそこに何らかのマークを付しておくという行為こそが必要であったためであろう。先に触れたものを除く ` の付された残りの67例であるが、これらには何の干渉も見られない。つまり、先ほど提示した ` の付された文字109例中、それが横の干渉によるものが29例・縦の干渉によるものが13例あるとこれまで論じてきたが、そもそも ` と ´ は同一符号の環境変異において選択されるものであり、結果的にはどちらが付されても同様の事象を表し得たのである。

先行研究では、マノエル・バレットが記した ` を、現代ポルトガル語での ` の機能から類推して考え、長音を示すものとして扱ってきた。このような見解が生じたのは、従来の研究が音と直結し、考察を行っていたためである。しかし、書記論の観点から「バレット写本」の ` を精査すると、「バレット写本」内で ` と ´ は左傾・右傾という対立で使い分けられたアセント符号ではないことがわかる。

## 5. マノエル・バレット書写以外の ` の検討

これまでの考察で、「バレット写本」では ` と ´ は同一符号の環境変異において選択されるものであるとした。これは版本が誕生する前段階の写本で見られる特徴である。そもそも版本で ´ は用いられない<sup>13</sup>。` についても、キリシタン版の文学作品で a の上に付され、ア段長音と対応させたと思われる例こそ散見するものの、ここまでで示したような様々な機能と対応させた使用は確認できない<sup>14</sup>。その他の同時代資料では、左傾・右傾によって示す機能の差異は考えられていたのか検討する。

### 5. 1. ポルトガル語での ` ・ ´

本語であるポルトガル語で ` と ´ が使い分けられていたのかを考えるために、当時のポル

トガル語の版本ではこの 2 つのアセント符号がどのように利用されていたかを検討してみよう。亀井（1983）に影印のある「*Doctrina Christã Ordenada a maneira de Dialogo, pera ensinar os mininos, Lisboa, 1602*」（以下「*Doctrina 1602*」）を精査し、` と ´ が用いられている語を確認した。

「*Doctrina 1602*」では、` が 105 例、´ が 18 例用いられている。その中には、同一の語にも関わらず、` と ´ の両方が付されたものもある。以下の表 3 で示す。

表 3 「*Doctrina 1602*」で同一の語に ` あるいは ´ を付したものの使用数

	fe	a	esta	de	so	la	o	ate	geral	nos
`	5	26	16	2	1	1	1	2	1	8
´	5	2	2	1	1	1	1	1	1	1

このように同一の語に対し、2 種類のアセント符号のいずれかが付されて同一文献内に表れている。ここで、当時このアセント符号がどのように使い分けられていたのかを考えよう。丸山（1988）は『日本大文典』・『日本小文典』を記したロドリゲスの著作のポルトガル語文に見られるアセント表記の傾向を以下のように示す。

1. アセント符号は一般に、付しても付さなくてもよいものである。
  2. ´, ` , ^, ˇ の間にはっきりとした使い分けは見られない。
  3. ただし、同綴異語を区別する時には、アセント符号を利用する。
- (p.73)

ここで 2. に記す「´, ` , ^, ˇ の間にはっきりとした使い分けは見られない」という指摘に注目する。この指摘は当時のポルトガル語表記において、アセント符号にはっきりとした使い分けがなかった可能性を示す。「*Doctrina 1602*」でも、` と ´ を異なる事象と対応させるために使い分けていたとは考えにくい。

また、当時の本語の写本での ` ・ ´ の表れ方も見てみよう。松田（1987）の『日本関係イエズス会原文書』に影印が収録されている以下の 2 つの文書を取り上げる。

「第一文書」

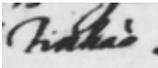
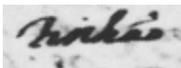
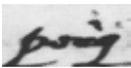
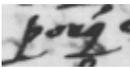
1587 年 8 月 5 日付 イエズス会総長宛 ルイス・フロイス執筆 1587 年度 第二日本年報

「第二文書」

1587 年 10 月 1 日付 平戸で執筆されたルイス・フロイス宛 アントニーノ・プレネスティエーノの報告書

これらの文書を記した 2 人の筆者がこの文書内で利用した ` と ´ を精査したところ、「第一文書」では ` が 9 例、´ が 272 例、「第二文書」では ` が 4 例、´ が 118 例使用されていた。この両文書ではどちらにおいても ´ が多用されている。この両文書内でも「*Doctrina 1602*」と同様、主として ´ を付して表されている語にも関わらず、` を付して表されている例を確認

できる。

- |        |   |                         |   |              |
|--------|---|-------------------------|---|--------------|
| ・ 第一文書 |  | 13r04 tinhaó            |  | 16r04 tinhaó |
| ・ 第二文書 |  | 9r21 porq <sup>15</sup> |  | 8v29 porq'   |

このように、本語の写本においても同じ語に ` と ´ が付される例がある。この例からも ` と ´ には区別がなかった可能性が考えられる。以上のことより、ここで取り上げた文献だけの調査ではあるが、この時代のポルトガル語でも、この二つのアセント符号にそもそも左傾・右傾という対立による機能の識別が設定されていなかった可能性が浮かびあがってくる。本稿で見た「バレット写本」で左傾・右傾の対立が設定されていないように、そもそもこの時代にこの対立、そしてこれらのアセント符号における明確な機能による使い分けは無かったと言えよう。

## 6. ` の指示していた事象

ここまでで、` は単に長音にのみ対応するのではなく、様々な事象と対応し、また ´ との関係も、同一符号の環境変異における選択によるものだという可能性を示した。ここから、森田（1976）が述べていた「ポルトガル語にあつては、` は母音が開音であることを示すとともに、一方では同じ文字の結合を示す」ために、キリシタン文献における ` は才段長音を示していたという指摘はあてはまらず、` は ´ と共に単なる o、u でないことを喚起するためのマークとしての役割を有していた可能性が考えられる。

従来の研究で ` の記述が不十分であったのは、アセント符号を音と対応するものとして考察してきたためである。しかし、音声ではなく書記論の観点から、そもそもなぜアセント符号が付されたのかという問題を検討すると、` と ´ が同一符号の環境変異において選択されるものであり、それぞれが特定の機能と対応していたわけではないことがわかる。

## 7. まとめ

本稿では以下のことを確認した。

- ・ マノエル・バレットが書写したアセント符号の ` と ´ を見る限り、この2つのアセント符号は左傾・右傾という対立で使い分けられていない。` を精査していくと、` には物理的スペースの有無という書記上の都合で記されていたものがあることが確認できる。このことから、単なる o、u でないマークとして用いられた ´ が、この書記上の都合により ` として表されることがあると推定した。これは ` と ´ が同一符号の環境変異において選択されるものであったためだと考えられる。
- ・ ` と ´ は、「バレット写本」においてのみならず、そもそもキリシタン文献が作成された時代の本語においても左傾・右傾という対立による機能の識別が設定されておらず、どちらも特定の機能を表示するために使用されていたわけではない。

今回、アセント符号の ` に注視して、考察を行った。今後の課題として、写本で様々な機能と対応していたアセント符号が、版本では特定の機能を示すための専用符号として用いられ

ようになる過程をさらに詳細に検討しなければならない。当時の製本・印刷状況を踏まえることで、当時の表記の実像について、さらに見えてくるものがあるだろう。キリシタン文献を扱った研究は、日本語史研究のために利用する研究を脱し、文献としての全貌の把握が必須となっている。今回の考察が、またその一助になればと願う。

## 参考文献

- 尾原悟 (1996) 『サントスのご作業 キリシタン研究第 33 輯』 教文館  
亀井孝 (1983) 『日本イエズス会版キリシタン要理』 岩波書店  
キリシタン文化研究会編 (1962) 『キリシタン研究第七輯』 吉川弘文館  
土井忠生訳 (1955) 『日本大文典』 三省堂  
千葉軒士 (2022a) 「「バレット写本」におけるアセント符号について — 長音に対応するアセント符号の諸相 —」 『中部日本・日本語学研究論集』 和泉書院  
千葉軒士 (2022b) 「キリシタン文献・ローマ字本のウ段長音表記変遷について」 『名古屋大学国語国文学』 115  
丸山徹 (1988) 「キリシタン資料「開合表記」成立の背景」 『南山国文論集』 第十二号  
松田毅一 (1987) 『日本関係イエズス会原文書』 同朋社  
森田武 (1976) 『天草版平家物語難語句解の研究』 清文堂出版  
森田武 (1993) 『日葡辞書提要』 清文堂出版

## 使用テキスト

「バレット写本」(1r-163r までは『キリシタン研究 第 7 輯』(吉川弘文館、1962)を利用した。164r-368v に関しては、Biblioteca Apostolica Vaticana (バチカン図書館)の図版を利用した。

<sup>1</sup> マノエル・バレットは、1590 年に来日したイエズス会神父。また、現存する『天草版平家物語』には手書きの語彙集が後綴されているが、この書写者も名前の記述こそないものの筆跡からマノエル・バレットと推測できる。この手書きの語彙集を本稿では「難語句解」と呼ぶ。

<sup>2</sup> 森田(1976)は、この撥音と対応する符号(`)について名称を与えていない。ただ、マノエル・バレットの書写を確認する限り、写本内では同じ形状を有しているアセント符号が長音、撥音などに対応していることから、本稿ではまずこれを ` と捉える。

<sup>3</sup> 本調査では、直立に近い形状を持ったアセント符号を ` として数えた。

<sup>4</sup> 「判断不能」の例はアセント符号を付した文字に後続する文字が濁音であり、ここで示そうとするものが長音か、あるいは濁音前鼻音か、またはその両方か、この判断ができないものを示す。また、各語が何と対応しているかの検討に際しては、尾原(1996)・キリシタン文化研究会編(1962)を利用した。

<sup>5</sup> 「z の例」とは、` の付された文字に後続する文字が z であるという意味である。以下、これに順じた表記をする。

<sup>6</sup> 使用率は以下のように出した。なお小数点第 2 位以下は切り捨てて示す。

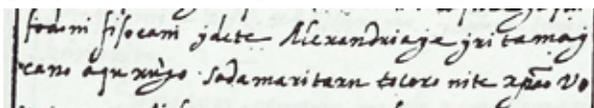
$$\text{ ` の使用率} = \text{ ` が付された文字に後続するある文字の使用数} / \text{ ` の使用総数}$$

$$\text{ ` の使用率} = \text{ ` が付された文字に後続するある文字の使用数} / \text{ ` の使用総数}$$

<sup>7</sup> 表 2 下部にある「行末」枠は 1 行内の末尾の文字にアセント符号が付されたものである。この場合、文字は後続しないので、別項目としてカウントした。

<sup>8</sup> 『日本大文典』の引用は土井忠生の『日本大文典』(1955、三省堂)の訳文による。また、その引用ページも土井(1955)に従ったものである。

<sup>9</sup> 表2を見ると、gも高い割合で ` が付されていた。しかし、写本内に現れる g は、以下の影印からもわかるように、文字の上部のスペースを奪わず、 ` を描くスペースに干渉していない。g は縦に長いとはいっても、上方に長いわけではなく、欧文のベースラインより下に飛び出す文字であり、この点で ` に後続する率が高かった他の b・d・j・z (ベースラインの上に飛び出す文字)とは異なっている。バレットが記す g が前接する文字のスペースを脅かすものではない以上、g に前接する文字に ` が多く用いられた理由は、横の干渉では説明できない。g に前接する文字に ` が多く用いられた理由はここで指摘した後続する文字の影響ではないだろう。この点はより広く写本におけるアセント符号の観察が必要となる。今後の課題である。



「バレット写本」299r04-05

fodoni fifocani ydete Alexandriae yri tamay (ほどに密かに出でて Alexandria へ入り給ひ)

cano aqu xùgo sadamaritaru tocoro nite xpaō vo(かの悪守護定まりたる所にてキリシタンを)

<sup>10</sup> 通常アルファベットを用いた文では、行末で語が分かれてしまう場合に次の行頭とのつながりを表わし、一語であることを明確に示すため、行末に-(hyphen)を配置する。ただし、「バレット写本」では-(hyphen)のみならず、= にこの機能を負わせており、この影印における= は語のつながりを示すものである。

<sup>11</sup> 千葉(2022a)は、「バレット写本」で長音対応箇所によくアセント符号は省略されること、また長音と対応するアセント符号の使用差について論じる。

<sup>12</sup> 千葉(2022a)、p.324による。

<sup>13</sup> 筆者の調査で版本では『サントスのご作業』に限って3例のみ、 ` かと思われる例が見られるが(『サントスのご作業』(1591)巻1 237-03 zaifóなど)、これは印刷の影響で ` が ` のように見えているのではと思われるものである。この点は、実際の資料調査により確認する必要がある。今後の課題である。

<sup>14</sup> 千葉(2022b)で、『日葡辞書』で使用される ` について論じている。参照されたし。

<sup>15</sup> q の上に ` ・ ` を付した文字が表示できないため、ここでは'q'および'q`'でqとそれぞれのアセント符号が一括された文字を示すこととする。

【付記】本研究は2021年度科学研究費助成事業(基盤研究(C))「宣教師によるキリシタン・ローマ字文献の表記法の実態解明」(21K00612)による研究成果の一部である。